



- ①進んで学ぶ生徒
- ②心豊かな思いやりのある生徒
- ③たくましい生徒

校歌に寄せる思い

校長 岡田 英行

埼玉県では、11月1日を教育の日、11月1～7日を教育週間としています。教育に対する県民の関心と理解を一層深めることを目的としており、この期間には県内各地で特別な催しが行われます。本校では、11月2日（火）に校内音楽祭を開催しました。体育祭・吹香祭と合わせて吹中三大行事と呼ばれる恒例のイベントですが、昨年が続いて参観者を各家庭一人とし、発表する学年ごとに総入れ替えとさせていただきました。ご理解とご協力に、改めてお礼申し上げます。



当日までの練習は感染症対策に苦勞し、緊急事態宣言中はハミングによる音取りだけ、解除後もマスクをしたままの声出しが続きました。それでもさすが「歌の吹中」と呼ばれるだけあって、クレアの大ホールに感動の歌声が響きました。また、開校75周年を記念して、弦楽合奏団のアンサンブル演奏に花を添えていただきました。唯一残念だったのは、大集団で密集して合唱するのは感染リスクが高まることから、全校で校歌を歌えなかったことです。

以前、本校卒業生である60代の地域の方から、「吹上中の校歌っていい曲だよな。」と声をかけられたことがあります。続いて、「清らかな泉湧く 吹上の園 ……」と懐かしそうに口ずさんでいらっしゃいました。卒業して何十年たっても、そして故郷を離れたとしても忘れがたいのが校歌です。また、在学当時の思い出を呼び覚ますスイッチとなるのが校歌です。

本校の校歌は、昭和30年度（1955）に制定されました。開校10周年が近づく中で、「ぜひ校歌を！」という強い要望が校内外にあったようです。校歌づくりは、まず歌詞の懸賞募集から始まりました。30数編の応募があり、その中から、開校以来勤務していた国語科の川辺夏生先生の作品が選ばれました。選定にあたったのは、その頃、県の作文指導における権威であった下山つとむ先生（当時・浦和高等学校長を退任）で、若干の補作を加えた上での発表でした。後に川辺先生は、「表現がやや古臭いかもしれないが、吹上に特有の地質・環境を的確に描写した。」と語っており、自信のほどが窺えます。しかし、完成したのは詞だけで、すぐに曲はできませんでした。作曲を担当した池田浩先生（当時・埼玉大学教授）から楽譜が届いたのは、年度末が近づいた卒業式の10日ほど前でした。真っ先に歓喜の声を上げたのは3年生で、「とってもいい曲。」「明るい。」「何だか胸がわくわくしてくる。」「『校旗を揚げば』の所が、いちばん迫ってくる。」「最後の『真理の扉をここに開け』の所は、涙が出そうになる。」等々の感想が、この年の生徒会機関誌『校友』に紹介されています。

おかげさまで開校75周年 ⑥

第74期生徒会執行部が産声を上げました。これをもって生徒会活動の中心は、3年生から1・2年年へと世代交代します。本校の生徒会は活発な活動が自慢であり、よき伝統となっています。しかし、開校当時は生徒会という組織はなく、「校友会」と呼ばれる校内組織がありました。会員は生徒だけでなく先生も含んでおり、それぞれの立場から学校生活の向上を図っていました。主な活動としては、現在の部活動にあたる課外活動があり、文化部（美術班・音楽班・書道班等）、体育部（陸上競技班・野球班・卓球班等）のいずれかに所属していました。そして、昭和24年8月に校友会は発展的に解消し、生徒会が発足しました。まさに名前のお通り、生徒自身の力で学校を盛り立てようとするもので、先生は見守り役になります。

組織こそ変わりましたが、機関誌『交友』は開校以来一度の休刊もなく現在まで続いており、今年度の発行は第75号となります。